

「ある生きものについて」

佐藤 洋祐

この世にある生きものが生まれました。最初それは何も求めなかったもので、満ち足りていました。少しすると、生きものには兄と呼ばれる別の生きものが近くにいることに気が付きました。その時、兄が「自分」より先に玩具を与えられているのを見つけたとき、この生きものに欲望が生まれ、欲しいものをめぐる戦いが始まりました。彼は「自分」の所有物に気付き、それによって「自分」を意識し始めました。「自分」はいつか何ものなのか、凶鑑をみたり、そして「自分」の身の回りにいる生きものたちを見て比べても、似ているようで良く観るとやはり違っているのです。「自分」が何と呼ばれ分類される生きものなのか、はっきりわからずにいきました。

やがてある生きものは兄以外のより多くの生命と関わるようになりまし。それまで集めた「自分」のものを駆使しながら、彼はより多く所有する楽しみを覚えまし。そこには形あるものだけでなく、知識や経験、技術、評判、機会や信頼などの目に見えないものも次第に含まれるようになりまし。が、とりわけ、他の生きものから喜ばれたり、褒められたり、愛されていると感じられるような称賛を得たときには、かえがたい喜びを感じまし。それと同時に、他の生きものが「自分」が望む名声を獲得しているのを目の当たりにして、強い嫉妬・憎悪の感情を覚え、また「自分」の自尊心を傷つける批評などに苦しみまし。彼はそれらの逆境に奮起して、さらに多くを所有せんとより深い戦いの中に身を投じていきました。

戦いを通して彼はそれなりに多くを所有することができましたが、それ以上に多くの敗北も経験まし。それでも、彼の持っている生命機能にダメージを与えるような過酷な事象には巡り合わず、また彼を愛し支えてくれようとする周囲に恵まれたので、この生きものは「自分」が幸運であることも自覚しはじめまし。一方で「自分」が生きているのはどうやら「自分」以外の誰かが命を落としたり、もしくは目に見えないところで生きる他者が充分な所有物を与えられていないおかげなのではないか、という同情の思いも芽生え始めまし。この戦いを続けることが「自分」にとって本当の幸せにつながるのだろうか、という疑いが生まれました。そこで、彼は一度戦いから身を引き、ずっとわからずいいた「自分」はいつか何者なのかを知る必要があると考えまし。



挿絵 TAKAKO

「自分」とは何かを知るために、彼はいろいろなことを試みまし。「自分」にとってこの世を生きるための乗り物であるらしき肉体を整備したり、有形無形を含めこれまでの集積物を改めて見直したり、「自分」が本当になりたい己の姿を良く想像し、欲望に逆らうことなくそれを目標に掲げたりまし。こうして他の生きものから少し距離を置いては「自分」と向き合うことを幾度となく繰り返す間に、ある年月を経たころ、とうやら彼は意識的に「自分」と戦っているもうひとりの「自分」の姿を認識し始めまし。新しい「自分」は、これまで「自分」だと信じて疑わなかったこの手強い「偽りの自分」と戦わねばならないことがわかりまし。すると、これまでのように「自分」と巡り合う他の生命と戦うことより、この「偽りの自分」こそが最強のライバル、それと戦うことが優先となり、この戦いが一生続くであろう覚悟を持つにいたりまし。それに気付くと、彼は周囲に対して少し穏やかになりまし。戦いの矛先を内側に向けることに集中し、「偽りの自分」を制しそれを抑え込む機会が増えてくると、その最強の敵に対しても少し優しさが芽生えてまし。これまでの「自分」が行ってきたあらゆる行為を受けとめると、同様にこれまで受け入れがたかった他者や他者の行為も、「自分」の行為として寛容にみなすようになりまし。た。「自分」が集積してきたあらゆるものは、他者のために活用するものだ、結局他の生きもの所有物だと思おうようになり、そうするとその収集、管理の楽しみも新たな輝きを放ち、これまで以上の喜びをそこに感じるようになりまし。これまでの「偽りの自分」に対して、よく努力したね、偉かったね、と愛の言葉をかけるようになりまし。もちろん、戦いは続いているようではありまし(笑)。

詰まるところ、このある生きものが「自分」と呼んでいるものは、彼自身であり、あなたでもあり、遠くに住むあの人でもあり、会ったことのない人々でもあり、あらゆる生きものであり、この世のすべてのことだったのでないかな、と、彼は今漠然とそう考えています。

2023年6月11日 佐藤 洋祐 (サトウ ヨウスケ) 筆

佐藤 洋祐 (サトウ ヨウスケ)

ジャズミュージシャン。サクソフス奏者としてクラミィ賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。

ジャズミュージシャン佐藤洋祐さんのコラム「ドラゴンへの階段」は今回で終了です。お楽しみいただけましたでしょうか。次号からは佐倉市在住、並木さくらさんの連載エッセイ「隣のばちゃん」が始まりまし。隣に住む、初老のばちゃんの日常を綴った話。生き物編では雀の他、アオサギ、ホトトギス、ムカデ、ヒバカリ(蛇)、タヌキ、犬などの話をお届けします。旅行編もありまし。皆様お楽しみに。